台大日本語文研究第 29 期
2015 年 6 月，頁 1-22
2015-03-31 收稿，2015-05-28 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2015.29.1

# 日本文學裡的女性
## ―以上代及中古為主―

陳明姿*

## 摘要

二十一世紀的現在女性主義及性別研究相當盛行，日本女性的地位也逐漸獲得改善，然而在半世紀之前，日本卻還是一個男女極不平等的國家，日本的女性究竟是何時開始、為何受到壓抑，而變得地位較男性低下呢？小稿為探討日本文學裡的女性形象，特別聚焦於《古事記》、《日本書記》、《伊勢物語》、《源氏物語》等上代及中古時期的文學裡的女性，以考察日本古典文學裡的女性形像。

關鍵詞：女性、《古事記》、《日本書記》、《伊勢物語》、《源氏物語》

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台灣大學日本語文學系教授

# The Female in the Japanese Literature: Ancient Age and Classical Age

Chen, Mung-tzu*

## Abstract

In the 21st century, the study on feminism and gender is prevalent. The social status of the Japanese women has gradually improved. However, half a century ago, Japan was still a country of extreme inequality between the male and the female. When did the Japanese women start to be so suppressed and why did they have lower social status than the Japanese men? In this paper, I intend to study the female image in the Japanese literature and focus on the works of the ancient and classical ages, Kojiki, Nihon shoki, Ise monogatari, and Genji monogatari, to have a better understanding of the female images in the Japanese classic literature.

Keywords: female, *Kojiki*, *Nihon shoki*, *Ise monogatari*, *Genji monogatari*

臺灣大學學術期刊資料庫

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

# 日本文学における女性像
## ―上代と中古を中心にして―

陳明姿*


## 要旨

十一世紀の現在、フェミニズムやジェンダーの研究が盛んになり、日本の女性の地位も少しずつ改善されたが、半世紀前までは、日本はまだ男尊女卑のははなはだしい国であった。いつから日本の女性が抑圧され、地位が低くなったのであろうか。小稿は日本の文学における女性像を探究する一環として、特に『古事記』、『日本書紀』、『伊勢物語』、『源氏物語』など上代、中古の文学に登場する女性に焦点をあて、日本の古典文学における女性像の変化について考察を試みる。


キーワード：女性、『古事記』、『日本書紀』、『伊勢物語』、『源氏物語』

* 台湾大学日本語文学系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# 日本文学における女性像
## ―上代と中古を中心にして―

陳明姿

## 一、序

二十一世紀の現在、日本は西洋思想に影響され、男女平等などの問題にも目を向け、女性の社会における地位も改善されるようになったが、半世紀前までは、日本はまだ男尊女卑のはなはだしい国であった。これは、十八世紀以来何度も版をかさね、長い間中層家庭の女子教育のテキストとして使用されて来た『女大學』からも窺える。『女大學』は十九条と教訓と結語から構成されている。最初の三カ条は女子の教育の必要と理念を述べ、後の十六カ条は妻としての心得を説くものである。その中の一カ条は次のようである。

> 婦人は夫の家をわが家とする故に、唐土には、嫁を帰るといふ。我家にかへるという事なり。假令夫の家貧賤なりとも、夫を怨むべからず。天よりわれにあたへ給へる家の貧は、我仕合の凶給なりとおもひ、一度嫁しては其家を出でざるを女の道とすること、古聖人の訓なり。若女の道にそむき、去るゝ時は一生の恥なり。されば婦人に七去とて悪しきこと七つあり。一つには、しうとしうとめにあり。舅姑に順はざる女は去るべし。二には、子なき女は去るべし。是妻を娶は子孫相續の為なれば也。然れ共婦人の心正しく、行儀よくして妬むこゝろなくば、さらずとも同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば、妻に子なく共、去に及ばず。三には、淫亂なればさる。四には、悋気ふかければさる。五に、癩病などの悪しき疾有ばさる。六に多言にて慎なく、物いひ過すは親類とも中悪しくなり、家みだるゝものなれば去るべし。七には、物を盗む心あるはさる。此七去は皆聖人

臺灣大學學術期刊資料庫

の教なり。女は一度嫁して其家を出されては、假令ふたたび富貴なる夫に嫁すとも、女の道にたがひて大なる辱なり。[1]

『女大學』にある誡めは、当時、すべて女性の具すべき美徳だと考えられていた。

この教訓は昭和二十年（第二次世界大戦終了時）まで、女子中等教育機関の修身用教科書として使われていたので、社会に対して大きな影響を与えたと思われる。日本において男尊女卑の傾向が著しくなった大きな要因と言えるだろう。だが、周知のように、「七出」（七去）[2]「三従」[3]などの法はもともと中国の女子に対する規制であった。そして、日本は奈良時代から平安時代にかけて、大規模な唐化運動を推進し、中国の制度を多く取り入れるに際して、儒教の女性に対する規範をも導入し、律令の中に組み入れたのである。言い換えれば、唐化運動までは、女性に対しては、このような制限を加えていなかったということになる。それゆえに、この規範を導入する前とその後の社会における女性の地位も違う筈である。古代日本文学では様々は女性が描かれているが、規範導入前と後で、文学の世界に登場する女性像がどう異なっているのかは、興味深い問題と言えよう。

小稿では、日本の文学における女性像を探究する一環として、特に上代と中古の文芸に登場する女性に焦点をあて、日本の古典文学における女性像の変化について考察を試みる。

## 二、上代文学における女性像

上代文学を繙くと､女性が各種の場で活躍している姿が目に付く。当時の女性は、抑圧される様子が見られないばかりか、一族の長、あるいは国の統治者を務める例さえある。もっとも知られているの

[1] 益軒会編纂 『益軒全集』巻之三(益軒全集刊行部明治 48 年 5 月発行)P686-687 に拠る。
[2] 漢 戴徳『大戴禮記・本命第八十』四部叢刊景明袁氏嘉趣堂本 中国古籍庫 P68 に拠る
[3] 漢 鄭玄『儀礼 喪服第十一』 四部叢刊景明徐氏翻宋刻本 中国古籍庫 P109 に拠る

臺灣大學學術期刊資料庫

は太陽神天照大御神であろう。例えば、中国やギリシャなどでは、太陽神を男性としているのに対して、日本では天照大御神を女性と記してある。天照大御神が生まれ出たのは、伊邪那岐命からである。伊邪那岐命は黄泉国から中つ国に戻って、筑紫の日向の橘の小関の阿波岐原で禊をした時、三貴子が化生する。左の目を洗った時に日神天照大御神、右の目を洗った時月神月読命、又鼻を洗った時に暴風雨の神建速須佐之男命が生まれ出たのである。伊邪那岐命はたいそう喜んで、三神にそれぞれ「高天原」、「夜之食国」「海原」を治めることを委任する。また、天照大御神は「天にあって照り輝く」偉大な神であるばかりなく、「穀神」としての神力をも持つ。『古事記』によれば、伊邪那岐命は天照大御神に高天原の統治を委任する時、御頸珠の名を「御倉坂挙之神」と言う。「御倉坂挙之神」は言うまでもなく神聖な倉の棚の上に祀られる穀霊のことである。すなわち、天照大御神は五穀の霊としての力も付与されるわけである。穀霊の役をも担っていることは、『日本書紀』の「神代」からも窺える。保食神は速須佐之男命によって殺されるが、その身体から蚕、稲種、栗、小豆、麦、大豆が生える。これらを取って栽培し、農業を始めたのも天照大御神である[4]。天照大御神は偉大な君主であると同時に農業技術の伝授者でもあるのだ。上代日本の女性が社会で担った役の重要性と地位の高さは、ここからも窺い知ることができよう。また、女性とはいえ、決してその戦いの力も侮ることはできない。性格の荒い須佐之男命が天照大御神に別れを告げるために、高天原を登って来た時、山も川も揺れ、国全体が震動したので、天照大御神は須佐之男命が高天原を奪いにやってきたと考え、直ちに男装して雄々しく対抗する。須佐之男命が天照大御神に背く心はないと弁明しても、天照大御神はすぐに信じようとしない。そのため、二人は天安川を挟んで誓約する。この時、須佐之男命の剣から三女

[4] 『日本書紀』の「神代」（上）第五段（一書第十一）に拠ると、保食神の身から生えた穀物を取って栽培した人は天照大御神である（坂本太郎他校注『日本書紀』（上）（『日本古典文学大系』67・岩波書店 昭和 45 年 4 月）。P102-103 参照

臺灣大學學術期刊資料庫

神が生まれ出、天照大御神の八尺の勾玉の五百津のみすまるの玉から天忍穂耳命五男神が生まれ出て、天照大御神は御子を持つことになる。この部分の語りは後の天孫降臨の伏線になると同時に、歴代天皇の神格性をも強調していると思われる。

高天原の君主として、天照大御神は固有の領地を守るばかりでなく、新しい彊域の開拓にも乗り出す。須佐之男命の子孫大国主神が葦原中国の国作りをした時、天照大御神は突如葦原中国を「我が御子正勝吾勝勝速日天忍穂耳命の知らす国ぞ」と宣言して、御子を高天原から天下りさせようとする。天照大御神の気魄は男性にも勝るのである。そして、天忍穂耳命は命を受けて降りようとするが、その時葦原中国がひどく騒いだので、それらの荒い国神を征服するために、天菩比神を遣わす。ところが三年たってもこの神は復命しない。そのため、第二の使者として天若日子を派遣するが、この使者もまた復命しない。そこで彼を責問するため、雉を遣わすが、かえって天若日子に射殺されてしまい、その矢は高天原まで射上げられる。そして、結局、天若日子は高木神、天照大御神達の裁きでその返り矢によって射殺されることになる。統治者としての天照大御神の行動力、決断力は決して男性に劣らないと言ってよい。

大国主神が国譲りしてから、太子天忍穂耳命が再び天照大御神と高木神の詔命で天降りしようとする時、折しも御子邇邇芸命が誕生したので、三種の神器を持たせ、天孫を降臨させることにする。そして邇邇芸命の曾孫神倭伊波礼毘古命は高天原の天神の助力で、やがて、葦原中国を平定し、神武天皇となる。すべては天照大御神の思わく通りに運び、彼女の直系子孫がみごとに葦原中国の支配者になったのである。こうして、女性である天照大御神は至高至上の皇祖神となり、日本の神話世界において永遠に光り輝くこととなったのである。

やや時代を下るが、推古天皇、皇極天皇（後の斉明天皇）、持統天皇、元明天皇、元正天皇も女帝である。また、『古事記』、『日本書紀』には、君主の性別について、古い時代では判然しない点が

臺灣大學學術期刊資料庫

あり[5]、古代の天皇は必ずしも全部男性とは限らず、上記の例のほかにも、女帝は尚多くいたようである。そして、事実上、天皇として権力を行使した神功皇后も頌歌されるべき女君主の一人である[6]。

神功皇后は仲哀天皇の皇后である。仲哀天皇は「西方の国を服属させよ」という神託を受けながら、これを信じなかったので、神の怒りを買って急逝する。国の大祓をしてから、建内宿爾と神功皇后は改めて神の託宣を請う。すると、先のと同じような神託を受ける。そのため、神功皇后は妊娠ししているにもかかわらず、天照大御神などの神達の指示通りに、海を渡って、その「西方の国」を臣服させる。神武天皇以来、歴代の天皇は国内の平定にのみ力を注いできたが、神功皇后に至って仲哀天皇の遂行できなかった外征の任務を果たしたわけである。

女性であるゆえに、指導者になってはいけないという制限もみられないし、女君主達の決断力、行動力は男君主にひけをとらない。そして、彼女達の功績はこれからも人々に称揚され、いつまでも語り伝えられていくと思われる。

主体的に生きたのは女君主に限らない。上代の一般女性達も束縛されることなく、のびのびと生きていた。「意志的」[7]に行為する女としてよく知られているのは『古事記』の中の須勢理毘売である。須勢理毘売は父須佐之男命と一緒に根国に住むが、ある日、根国を訪れた大穴遅命と「目合為」る。古代での「目合」とは単に目を合わせるだけなく、男女が情を通じ合わせるという意味として使われている。これは、伊邪那岐命と伊邪那美命との聖婚、また、山幸と海神女豊玉毘売との出会いの語りからも分かる。ゆえに、ここも、須勢理毘売と大穴遅神が心をと通わせて結婚したと理解してよいだろう。彼女は自分で結婚相手を選び、すぐに家に連れ帰って、父の

[5] 折口信夫「最古日本の女性生活の根底」(『折口信夫全集』第二巻　中央公論社　昭和 57 年 4 月) P147-150 参照
[6] 『日本書紀』の方では、神功天皇を卑弥呼に擬して書いているが、『古事記』の方では、別人として語られている。
[7] 倉塚曄子「古事記の須勢理毘売」(『国文学』学燈社　昭和 57 年 9 月) P12-13 参照

臺灣大學學術期刊資料庫

須佐之男命に「甚麗しき神来ましつ」と言う。「麗しき神」「麗しき人」[8]とは、女性が自分の愛する男性のことを指して言う詞である。そのため、須佐之男命は須勢理毘売の言葉を聞いて、すぐ娘が大穴遅神を婿として選んだことを理解する。それから話は難題婿説話へと転化する。須佐之男命が大穴遅神に蛇の室、蜈蚣・蜂の室で寝かせたり、頭の虱（実は百足）を取らせるなど、様々な難題を課す。しかし、須勢理毘売の助力で、大穴遅神はたやすくこれらの試練を乗り越え、須佐之男命はしだいに大穴遅神のことを「愛しく」思うようになる。そして、二人は須佐之男命が寝ている間に、その大刀、生弓矢、沼琴を盗んで、根国から逃げ出す。須佐之男命は、やがて気付いて、二人を追うが、黄泉比良坂のところでやめ、大声で大穴遅神に大刀と生弓矢で出雲国を平定し、須勢理毘売を嬌妻にして、国主となるように祝福のことばを投げかける。須勢理毘売は自分の意志で結婚相手を決め、しかも夫を助けて様々な難関を乗り越えた。それは夫を危難から救ったばかりでない。自分の父の心の中での夫のイメージをアップさせ、それによって須佐之男命がしだいに夫に好感を持つようになっている。須佐之男命が、ついに二人が結ばれることに同意し、大刀と生弓矢を譲った上に祝福の言葉を送ったのも、彼女の積極的な行動があったからである。能動的に行為する、情熱的で聡明な女性の姿が鮮明に浮き彫りにされている。

同じく『古事記』の中の女鳥王も、意志的に行動した女性の一人である。女鳥王は仁徳天皇の求婚を拒否した。その理由を、女鳥王は天皇が派遣してきた求婚の使者速総別王に「大后の強きに因りて八田若郎女を治め賜はず。故、仕へ奉らじと思ふ」[9]と述べている。女鳥王は同母姉八田若郎女の受けた扱いをよく知っているのである。大后の嫉妬を恐れ、他の妃を愛せない男性が、改めて他の女性を妃

[8] 『古事記』の中にある豊玉毘売と山幸との出会いにもこの言葉が使われている。豊玉毘売が父海神に自分の愛する山幸のことを紹介した時に「吾が門に麗しき人あり」と語っているのである。当時の女性が愛する男性のことを「麗しき人」と表現していたことがわかる。

[9] 萩原浅男、江島巣隼男校注・訳『古事記・上代歌謡』（『日本古典文学全集』Ⅰ、小学館　1990 版 9 月第 21 版）P283 に拠る

臺灣大學學術期刊資料庫

として迎え入れても、幸せにすることはできない。たとえ、天皇であっても、こういう男性はもう他の女性に求婚する資格はない。そう思って、女鳥王は敢然と仁徳天皇の求婚を拒否したのである。しかし、当時、天皇の求婚を断ることは、言うまでもなく天皇の怒りを招き、禍を被ることになる。それは、王族の出身である女鳥王も心得ていた筈であるが、そのまま意に染まぬ現実を受け入れることは、主体性の強い彼女にはできないことであった。また、彼女は天皇の求婚を拒否したばかりでなく、さらに求婚に来た使者に「吾は汝命の妻に為らむ」と逆求婚している。この行動をとった動機は、二つあると考えられる。一つは女鳥王が能動的に速総別王こそ愛すべき男性だと考えたからであろう。もう一つは大后を恐れながら、他の女性の妃として迎えようとする天皇の勝手さ、無責任さに対する抗議ということもあるかもしれない。いずれにしろ、天皇への反逆行為にあたる。女鳥王も天皇の求婚を断って速総別王と結婚すれば、破局が必然的に訪れることを知らない筈はない。それを覚悟の上で取った行為であるために、事情を調べに来た天皇に誰のために氣を織っているのかと聞かれると、彼女は

高行くや　速総別の　御襲料[10]

と堂々と答える。女鳥王は天皇に自分が速総別王を夫として選んだことを表明しているのである。天皇にとって、それは耐えがたい屈辱であろう。しかし、二人のことはいずれ天皇の知るところとなり、そうなれば、どんな口実を作っても、軍勢を集めて、二人を殺しに来ることを知っている女鳥王は、二人が結ばれた以上、何憚ることはないと考えて、天皇が行動を取る前に、さきにこちらの意図を表明したのである。されに彼女は夫の速総別王に次のような歌を贈っている。

雲雀は　天に翔る　高行くや　速総別　鷦鷯取らさね[11]

ささぎは仁徳天皇の名である。したがって、その歌は天皇に対する

[10] 注九同掲書 P284 に拠る
[11] 同注十

臺灣大學學術期刊資料庫

挑戦状とも言える。案の定、天皇の軍はすぐに二人を殺しに来る。だが、追われる二人はどんな情況にあっても、助け合いながら、道をともにする。倉椅山まで追いつめられた時、険しい山道を辿りながら、速総別王は次の二首の歌を歌った。

梯立の　倉椅山を　嶮しみと　岩掻きかねて　吾が手取らすも
梯立の　倉椅山は　嶮しげど　妹と登れば　　嶮しくもあらず
[12]

ここでの険しいとは単に地形のことを指して言っているのではなく、周囲の情勢の険しさをも言っていると思われる。速総別王も死へと一歩一歩近づいていることを目覚しているが、いとしい女鳥王と一緒なら、どこまでも行こうと心に決めたのであろう。速総別王の女鳥王への愛の深さが窺える。これは、決して仁徳天皇の妃になったところで得られるものではない。女鳥王が、なぜ仁徳天皇の求婚を拒否して、速総別王の妻になったか、ここに来て読者にもはっきりと理解されるであろう。

女鳥王は悲劇的な最期を遂げた。しかし彼女はまぎれもなく能動的な人間として、誠実で変わらぬ愛を勝ち取り、主導的に生きることができたのである。

歌であるがゆえに、字数や形式に制限されて、説話文芸『古事記』のように精細に描写されているわけではないが、『万葉集』の中にも、このように情熱的かつ能動的に行動する女性像が見受けられる。

事しあらば、小泊瀬山の　石城にも隠らば共に、な思ひ我が背
（『万葉集』16・3806）[13]

右、伝へて云はく、時に女子あり、父母に知らせず、竊かに壮士に接る。壮士その親の呵嘖はむことを悚惕りて、稍く猶于ふ意あり。これに因りて、娘子この歌を裁作りて、その夫に贈り与ふ、といふ。

[12] 同注十
[13] 小島憲之他校注・訳『万葉集』(4)（『日本古典文学全集』5　小学館 1975 年 10 月初版・1990 年 9 月十七版）P119 に拠る

臺灣大學學術期刊資料庫

駿河の海　おしへに生ふる　浜つづら　汝を頼み　母に違ひぬ（『万葉集』14・3359）[14]

この二首の歌は、いずれも女性が愛する男性へ真情を吐露したものである。親に反抗してまで自分の恋愛の貫きたい女性の情熱と意志が現れている。制度や道徳に束縛されることなく、健康で、伸やかに生きていた上代の女性達の姿が浮彫にされていると言ってよい。

勿論、このように行動的で、自由に生きる女性も、結婚によって悩みをかかえるようになる場合がある。古代日本の社会では、夫婦別居の妻問い婚が行われているため、男性に他に好きな女性ができれば、旧妻の所へ通わなくなる例も多くあるようである。それゆえに、夫の足が遠くことを嘆いている歌も見られる。

眠も寝ずに、我が思ふ君は　いづく辺に　今夜誰とか　待てど来まさぬ（『万葉集』13・3277）[15]

右はまぎれもなく、夫が他の妻のところへ行って、一人で寂しく夜を過　さなければならない女性の悲嘆である。

しかし、その当時は、女性の言動を制限する法令がなかったゆえに、女性も憚らずに心の不満を表していたとも言える。先に触れたが、勢須理昆売は大穴遅神を様々な危難から救い、そして、彼とともに根国から出雲へと駆落ちをした。大穴遅神は須佐之男命にも祝福され、めでたく大國主神となる。では、勢須理昆売はその後、夫とととともに幸福な日々が過ごしたかと言えば、そうでもない。大國主命があちこちに妻を訪ねるために、彼女は夜な夜な独りで空閨を守らなければならない。

これはもちろん、勢須理昆売の望んだ婚姻生活ではなかろう。こんな生活のために大國主命と根国から駆落ちして来たのではない。だから、彼女は不満を露骨に表し、困り果てた大國主命は、大和へ旅立とうとする。が、旅装を整えて、出発しようとする時、やはり

[14] 小島憲之他校注・訳『万葉集』(3)(『日本古典文学全集』4　小学館 1975 年 10 月初版・1990 年 9 月十七版）P449 に拠る。
[15] 注十四同掲書 P402 に拠る

臺灣大學學術期刊資料庫

いとしい妻のことが気にかかり、「私が従者達と行ってしまったら、おまえは泣くのだろう。嘆くのだろう。」と、歌によって妻への愛情を表す。これに対して、勢須理昆売は夫のそばに寄り、盃を捧げて次のように歌う。

> ハ千矛の　神の命や　吾が大國主　汝こそは　男に座せば　打ち廻る　島の　崎々　かき廻る　磯の崎落ちず　若草の　妻持たせらめ　吾はもよ　女にしあれば　汝を除て　男は無し（後略）[16]

聡明で、意思的に行動する勢須理昆売も歌によって、自分の夫への真情を表した。これを聞いて、大國主神は心を打たれ、ついに旅立ちを思いとどまる。歌の唱和によって、互いに相手を思う心を打ち明けあって、仲直りしたわけである。

以上の話からもわかるように、夫が他の女性を訪れたりする時、上代においては、本妻の方も堂々と抗議し、内心の不満を表す。そして、それを、夫も完全に無視するわけにはいかない。そのような例は、勢須理昆売の説話の他に、『古世記』や『日本書紀』の中にある盤之媛（仁徳天皇の皇后）と忍坂大中姫（允恭天皇の皇后）の説話の中にも出て来る。すなわち、同時は女性を縛り付ける不合理な制度がなかったゆえに、女性は自主的かつ能動的、そして伸びやかに生きていたのである。

## 三、中古文学における女性像

しかし、女性が自由に生きる空間は、やがて社会の経済形態の改変によって、大きく圧縮されることになる。農耕生活の普及とともに、土地の私有化、労働力の争奪が始まった。それゆえに、体力的には優勢な男性が、次第に農業生産の主導権を握るようになり、ついに男性中心の社会へと発展していったのである。七世紀半ばに行われた大化改新は、女性にとって悪夢の始まりだったと思われる。大化改新はすなわち唐化運動であり、中国の思想、文化、制度など

[16] 注九同掲書 P105 に拠る

臺灣大學學術期刊資料庫

が多く取り入れられ、その中には女性を規制する礼法制度、文化思想も多く含まれている。いわゆる「三従」「七去」などの悪法も受け入れられた。女性は父兄、夫の命令に服従しなければならないし[17]、また、七出の条、即ち⑴無子⑵婬泆⑶不事姑舅⑷口舌⑸竊盗⑹妒忌⑺悪疾の中の何れか一つの事由がある場合は、離縁されることとなった。そしてこれらによって、やがて女性自主権を失い、男性に隷属して生きなければならない立場に追い込まれたのである。

平安時代に入って、中国文化の摂取、模倣の気運が一段と高まるとともに、女性への規制も一層厳しくなり、やがて、それが社会生活全般に浸透し、ついに個人の精神生活まで支配するようになった。女性が公式の場でいかなる待遇を受けるのかは、個人の素質や才能と関係なく、すべて後見者である父兄、あるいは夫の権勢や地位によって決められたのである。紫式部の仕える中宮彰子が、天皇の寵愛を受け、周囲の人々に敬愛され、ついに後宮を支配し、皇后の位に即くことができたのは、彼女の父親、すなわち後楯である藤原道長が当時、もっとも権勢のある人だったからである。逆に強固な後見者がなければ、天皇の寵愛を一身に受けても、傍輩の女御や更衣から嫉まれ、排除され、ひたすら苦しい日々を過ごさなければならない。『源氏物語』の桐壺巻で、桐壺更衣が帝のなみなみならぬ寵愛を受けながら、ついに三歳の光源氏を残し、世を去らねばならなかったのも後楯がなかったためである。

このように女性は男性に頼まらないと生きていけないので、幸福になれるか否かは、すべて結婚の相手次第である。例えば、『落窪物語』の女君は左近少将といういい相手にめぐりあったから、幸せになれたが、他の女性は必ずしもこういう幸運に恵まれるとは限らない。平安時代には、上代の妻問い婚を引き継いだ通い婚が行われたために、実質上一夫多妻制である。多くの男性は戸籍に登録された正妻以外の女性とも交渉し、複数の妻妾を持っていた。それゆえに、当時の女性はしばしば、夫が俄かに心変わりして、他の女性を新妻

[17] 牧健二『日本法制史』（平凡社　昭和 5 年 11 月）p 119 参照

臺灣大學學術期刊資料庫

として迎えるという不幸に遭ったのである。しかし、こういう時、本妻はどんなに思い悩んでも、嫉妬したり、恨み言を言うことはできなかった。心の辛さを押し殺して、こころよく夫を新妻のところへ送り出さなければならなかった。すると、いつか夫がまた戻って来ると教育されていたからである。男性の手によって書かれた『伊勢物語』第二十三段筒井筒に登場する「女」は、そのように造型された女性である。

むかし、おなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりにければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ、

筒井つの筒井にかけし
まろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も
肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前栽のなかにかくれゐて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たった山夜半にや君がひとりこゆらむ[18]

と詠んだ。

[18] 片桐洋一他校注・訳『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（日本古典文学全集 8 小学館 昭和 55 年 8 月）p155-157 に拠る

臺灣大學學術期刊資料庫

幼じみの二人恋は、親の隔てに遭いながら成就する。ようやく結ばれた二人ことだから、生涯愛し合って幸せに暮せるかと思われたが、やがて、女の方が親を亡くし、貧しくなったので、男の方が他の女のところへ通うようになる。本妻の悲しみは深かろう。しかし、彼女は悲しみを押さえて、恨み言も言わず、憎いと思うような様子も見せないで、見も心も夫に尽くす。そして、夫はついに心を打たれて、彼女のところへ戻って来る。こういう類型の説話は『大和物語』にも収載されている[19]。いずれも、夫が他の女性のところへ通い、どんな辛いことがあっても、妻は夫に忍従すべきとする考え方に基づいており、そういう女性こそ夫の愛が得られる理想的な妻だと語られている。これは、当時の男性達が女性達に仕込んだ教育と思われる。今触れた『伊勢物語』第二十三段の妻などは、男性が女性に示した理想的な妻像であろう。

一方で、そういう制度下に生きる女性達のせつなさ、煩悩も女流作家によって文学作品に現れている。『蜻蛉日記』は、作者藤原倫寧女自身と藤原兼家との二十一年の結婚生活を回想して書き上げられた日記である。彼女はまず古物語の非現実性を批判し、兼家の求婚を受けたことを語っていく。古物語を愛読していた作者はもともと恋愛と結婚に夢を持っていたが、現実世界と古物語の世界とはあまりにもかけ離れていたため、彼女の夢ははかなくも破れてしまう。まず、第一に、藤原兼家の求婚はかねて想像していた優雅な作法とはまるで違って、実際的で単刀直入だったから、彼女は大変驚く。だが、兼家の求婚は胸をときめかせるものであったから、ついに受け入れることにする。結婚して、まだ夫に十分に馴染まないうちに、父藤原倫寧が陸奥へ出仕し、京に残された作者は、これから夫兼家との愛情生活にすべてをかけて生きるほかないと気つかされる。しかし、二人が結婚して一年経て、作者が道綱を生んだ頃、夫兼家に新しい愛人・町の小路の女ができる。それから、新しい愛人のとこ

[19] 『大和物語』の第１４９回「沖つ白浪」の話も『伊勢物語』第２３回の筋と似ている。但し、『大和物語』細部はいささか異なっている。

臺灣大學學術期刊資料庫

ろへ通うためか、兼家の夜離れが続く。悲哀と不安を噛みしめ、作者は「なげきつつ一人寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る」という歌を詠み上げる。それは作者だけでなく、当時に生きるすべての待つ女の寂しい心境を表した歌であろう。

兼家は町の小路の所へばかり通い、作者の所へは途絶えがちになったので、二人はますます険悪な状態に陥る。孤独、悲傷の深淵につきおとされ、彼女は捨てられたのではないかと思って、夫の他に何も目に入らない放心状態に近い状態に陥る。また、彼女は嫉妬に狂って、ついに町の小路の女に対して「命はあらせて、わが思ふやうに、おしかへしものを思はせばやと思ひしを」(上巻)という憎悪の感情さえ持つようにもなる。彼女がいかに不安と苦悩に苛まれているのかが明らかに示されている。天徳二年、作者と兼家が結婚してから四年目に、兼家はようやく町の小路の女のところへ行かなくなる。しかし、作者は依然として兼家の愛を独占できない。時姫と道綱母を入れれば、兼家は九名も妻、妾を持っている[20]。それゆえに、町の小路の女のところへ通わなくても、作者が願うように、夫が「三十日三十夜はわがもとに」(中巻)来るということは不可能である。特に夫が栄達するに連れて、夫婦の感情はますます隔たりを増す。悲哀と孤独を深く味わわされたあげくに作者は、一夫多妻制の社会に生きる女性、特に権門の妻となった女性にとって、夫の専心な愛情を求めようというのは、はかない夢に過ぎないということを悟るようになる。それは、彼女が日記の冒頭に「かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。」と語った言葉からも窺い知ることができる。彼女は、こういう「はかなき」身の上を乗り越えて行く唯一の方法は結婚生活の体験を書くことだと悟り、この日記を書き始めたのである。『蜻蛉日記』を書くことによって、彼女を自己認識を深め、「あはれ」の世界

[20] 松村誠一、木村正中、伊岸田経久校注・訳『土佐日記　蜻蛉日記』(『日本古典文学全集 9』、小学舘 1989 年 8 月) p92 参照

臺灣大學學術期刊資料庫

へ到達した[21]。そして、後世の人もこの日記によって、平安時代の女性のせつなさと苦悩を理解できるのである。

藤原倫寧女ばかりではない。紫式部も『源氏物語』の中で、当代女性の存在の不確かさとその根源の弱さを詳しく語っている。式部は生まれながらの文学者で、和漢の文学に通じ、鋭敏な観察力と卓抜した表現力を有していた。そして、何よりも、彼女は豊かな閲歴を持っていた。これは宮中に仕えている時に見聞きした様々な事のみを指しているのではなく、彼女自身が味わわされた当時の女性としての苦悩とせつなさをも含む. 紫式部の結婚年齢については、二十七歳（生年 973 年、結婚年 999 年）とする説[22]、また、二十九歳（生年 970 年、結婚年 998 年）とする説[23]などがあるが、いずれにしろ、当時としては、異類の晩婚である。もしかすると、これは最初の結婚かもしれないし、あるいは独身主義を通そうとしたが、藤原宣孝の情熱的な求婚に打たれて、ついに結婚に応じたのかもしれないが、そのあたりは判然としない。しかし、宣孝は当時すでに四十七歳[24]、式部とは親子ほど年齢の違う相手であるから、彼女のこの結婚に生涯の幸福をかける気持ちには、なみなみならぬものがあったであろう。それにもかかわらず、結婚後の式部は当時の世間なみの人妻の苦しみを味わわされることになる。宣孝の夜離れを嘆いて「しののめの 空霧り渡りいつしかと　秋のけしきに世はなりにけり」と歌を贈ったりもしている。二人の仲は一時危機に瀕していたのである[25]。夫婦不和の状態は父為時が長保三年帰郷してから、ようやく改善されたが、その幸福は束の間に終わった。夫宣孝が四月の下旬に死んだのである。彼女の結婚生活は三年も満たなかった。不幸な結婚生活で味わわされた孤独感と夫を亡くした時の喪失感は、

---

[21] 菊田茂男「家の女—蜻蛉日記」(『国文学』学燈社　昭和 50 年 12 月）pp.65-72 参照
[22] 岡一男「紫式部の生涯」(『源氏物語講座』第六巻　有精堂　昭和 51 年 7 月）pp.1-58 参照
[23] 阿部秋生他校注・訳『源氏物語一』(『日本古典文学全集 12』、小学舘　1970 年 11 月初版　1980 年 7 月第十二版）p34 参照
[24] 同注二十二
[25] 今井源衛『紫式部』（吉川弘文館　　昭和 60 年 9 月　）P97 参照

臺灣大學學術期刊資料庫

彼女をして人生の無常、情愛のはかなさを深く体得せしめたであろう。そして、それはまた、『源氏物語』の好材料になったと思われる。

『源氏物語』は光源氏の一代記には違いないが、作者が女性のためであろうか、女性の描写にもかなりの筆が費やされている。作品の中には、様々な女性が登場する。故坊の未亡人でありながら、愛人に冷たく扱われたゆえに、分裂し（魂が身から遊離し、愛人の妻妾を取り殺すこと）身を滅した女性もあれば、この例を見て、女性の根源の弱さを思い知らされ、ついに結婚を拒否した女性もある。そして、中で最も読者の興味を引くのは、言うまでもなく女主人公紫の上であろう。彼女は、源氏の憧れの女性藤壺に生き写しだったため、十歳の時、源氏に引き取られ、妻となるための理想的な教育を施される。そして、彼女が十四歳、源氏が二十歳の時、二人は新枕を交す。紫の上は容姿ばかりでなく、知恵、才覚、人柄も源氏の求める理想的な女性のタイプとなっていた。しかし、こういう理想的な妻を持っていながら、源氏の他の女性との交渉は絶えない。彼は朧月夜との密事が露見し、流謫されるが、その流謫の時期にさえ、明石の君と契り、娘まで生ませる。また、三十二歳の時、昔から思いをよせていた朝顔の姫君が賀茂斎院を辞して自邸に戻ったことを知り、源氏は執拗に彼女を口説く。このように、紫の上と源氏との結婚生活は波瀾に富んでいて、決して平穏なものではなかった。歳月の流れとともに、源氏もしだいに年を取り、これからはもう幸せな日々が続くかと思われてからも、源氏は新たに朱雀院の女三の宮を正室として迎えることにする。源氏が四十歳の時である。今まで正妻として扱われて来た紫の上には恰も青天の霹靂であっただろう。しかし、当時の社会では、女性に対する様々な厳しい規範がすでにできあがっており、こんな時、嫉妬で取り乱したら、「人笑い」になるだけである。そのあたりを聡明な彼女は心得ており、慎重に対応する。最初、彼女はまず東の対の部屋へ移り、自ら正妻の座を譲る。そして、苦しみに堪えて源氏に協力して女三の宮を迎えるための様々な些細なことまでする。彼女の言動は確かに当時の女性の鑑に

臺灣大學學術期刊資料庫

なっている。しかし、作者は単に彼女を父権教育体制下の優等生として書いているのではない。紫式部は紫の上がいかに苦しみと悲しみをかみしめているのかをも詳しく描き出しているのである。

女三の宮を迎える時、朱雀院の方も、六条院側の様子もはなばなしく、紫の上もことにふれて、「ただにも思わされぬ世のありさまなり」と思わないわけにはいかない。また、女三の宮は華やかでしかも悔りがたい威勢で降嫁してきたので、「なまはしたなく」思う。紫の上は強く不安を感じている。さらに、彼女は依然として冷静に振舞ってはいるが、新婚の三日間、毎晩欠かさず女三の宮のところへ行く源氏を見て、紫の上は「忍ぶれどなほものあはれなり」と感じる。三日目の夜には、もう幾夜も寂しいひとり寝を過ごして来たために、「なほただならぬ心地」がして、ついに一晩中寝られない。そして、人知らず苦しみをかみしめている間に、苦悩はしだいに強烈なものなのかが、この夢の導入によって明白に示されているのである。それなのに、彼女は苦悩を必死に抑え、理知的に、そして奥ゆかしく行動する。紫式部は、紫の上が内心の辛さと悲しみを無理矢理に抑制して、理性的に振舞っていることを、繰り返し強調して描き出すことによって、主体性のある女性・紫の上がいかにして、女性を制度的に圧迫する社会の下で、「人笑い」にならないで、自身の尊厳を保った。しかし、理知と感情との葛藤によって、彼女は身も心も深傷けられた。それゆえ、彼女の言動は夫を含めて、すべての人に称揚されはしたが、自我を抑圧しすぎたため、ついに病気で倒れ、帰らぬ人となる。そして、はるか後の徳富蘆花「不如帰」の女主人公片岡浪子が臨終の病床で「あ、辛い！辛い！最早一最早婦なんぞに一生まれはしませんよ」と叫ぶことからもわかるように、千年来、日本の多くの女性は紫の上と同じように存在の不確かさと根源の弱さを深く味わわされてきたのである。

## 四、結び

臺灣大學學術期刊資料庫

以上試みに上代と中古の文学に登場した女性像を中心にして考察してみたが、おおよそ次のようなことが言えよう。

日本の女性はもともとは社会的地位が高かったのである。『古事記』などに登場する上代女性は、いずれも自主的かつ能動的に、そして、のびやかに生きている。中には、天皇や統治者として権力を行使した女性さえいたのである。しかし、女性が自由に生き、二つの性の間に主従の区別のない状態は、やがて社会の経済形態の変化と大化改新によって、大きく変わっていった。平安時代に入ってから、中国から受容した思想が社会に浸透したために、女性がしだいに自主権を失い、男性に隷属して生きていかなければならなくなったのである。それゆえに、文学に登場する女性像も、上代の明るく、能動的な姿から、不安と煩脳を抱えた姿へと変わっていく。男性に依存しないと生きていけない時代の女性にとって、幸せになれるか否かは、すべて結婚次第であるが、一夫多妻の制度下では女性はしばしば夫の心変わりにより不幸に陥った。不安と孤独に襲われながらも、当時の社会のきびしい制度に縛られ、世間の目を憚らなければならないから、平安時代の女性は常に存在の不確かさや根源の弱さを味わわされたのである。そして、このようなあわれな女性の生きかたは千年も続いた。

フェミニズムやジェンダーの研究が盛んになる現在女性の社会における地位も少しずつ向上した。新世紀では、男女の二つの性が本当にへ平等になり、しかも、互いに協力し合い、ともに人類の文明・文化の進歩に貢献できるようになることを願わずにはいられない。

**参考文献**

阿部秋生他校注・訳（1980）『源氏物語一』（『日本古典文学全集』12）
小学舘
今井源衛（1985）『紫式部』吉川弘文館

臺灣大學學術期刊資料庫

益軒会編纂（1911）『益軒全集　巻之三』益軒全集刊行部
岡一男（1976）「紫式部の生涯」『源氏物語講座　第六巻』有精堂
折口信夫（1982）「最古日本の女性生活の根底」『折口信夫全集　第二巻』中央公論社
片桐洋一他校注・訳（1980）『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（『日本古典文学全集』8）小学館
菊田茂男（1975）「家の女—蜻蛉日記」『国文学』昭和 50 年 12 月号、P.65-72　学燈社
倉塚曄子（1982）「古事記の須勢理毘売」『国文学』昭和 57 年 9 月号、P.12-13　学燈社
小島憲之他校注・訳（1990）『万葉集（3）』（『日本古典文学全集』4）小学館
小島憲之他校注・訳（1990）『万葉集（4）』（『日本古典文学全集』5）小学館
坂本太郎他校注（1970）『日本書紀（上）』（『日本古典文学大系』67）岩波書店
萩原浅男、江島巣隼男校注・訳（1990）『古事記・上代歌謡』（『日本古典文学全集』1）小学館
牧健二（1930）『日本法制史』平凡社
松村誠一、木村正中、伊岸田経久校注・訳（1989）『土佐日記・蜻蛉日記』（『日本古典文学全集』9）小学舘
漢 鄭玄（2008）『儀礼 喪服第十一』 四部叢刊景明徐氏翻宋刻本 黄山書社 (中国古籍庫)
漢 戴德（2008）『大戴禮記・本命第八十』四部叢刊景明袁氏嘉趣堂本 黄山書社 (中国古籍庫)

臺灣大學學術期刊資料庫